群集ペパーミント

琉珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
群集ペパーミント

【Ｎコード】
Ｎ７０２０Ａ

【作者名】
琉珂

【あらすじ】
小さなつながりで進んで行く物語。

first page

人は小さな小さな繋がりをもって成り立っています。

その繋がりはとても強いものだったり、とても弱いものだったり。

さて今回は。

その太くも細い繋がりの糸を手繰って行きましょう。

ｆｉｒｓｔ　ｐａｇｅ（後書き）

終わりは決めてないので先がちょっと見えてません。気儘に更新したいと思います。ちなみにタイトルは歌のタイトルから取ってます。

銀河鉄道

誰も近寄ってこない事に苛付くのとんだおかど違いだ。
分かっているのだが人の感情はそんな理性など気にもせず生まれる。
髪はブリーチで金色。
両耳には大量のピアス。
そんで座席にどっかり構えて座ってりゃみんな避けたくなるだろう。
俺は今長年住み慣れた小さな町を離れるため列車に乗っている。
別にヤバい奴等に追われてとかじゃないぜ？
何となく違う世界に行ってみたくなったんだよ。
自分の視界があまりに狭い事に気付いちまったからさ。
ガキの頃から一緒に育った仲間が言ったんだよ。
「俺ら、何にも知らないよな」
満天の星空の下。
ちっぽけなのは一体何だと。
親に反発したりされたり、仲間と殴り合いの喧嘩をしたり。
目が合っただけでボコボコにした事もあった。
そんな若気の至りの中で髪に色は付いたし、耳には穴が開いた。
そういえば母親泣いてたな。
この状態になった時。
父親は殴ってきたし。
今ではすっかり和解して普通の親子になれたけど。
だからいきなり俺がこの町を出るつっても反対しなかった。
好きな様にしろってさ。
仲間も応援してくれた。
列車に乗りながら、俺はなんて幸せ者なんだって感極まったなぁ。
なのに何なんだよ。
たった一駅挟んだだけでみんなして俺の事見下げてくる。
こんななりしてる俺も悪いけど、人は見た目じゃねぇって盛んに叫

んでるのはてめぇらだろ？
向こうに行ってもこんな目で見られんだろうか。
やっぱ髪元に戻すべきだったかな。
俺はそんな事を考えながらポケットから赤い包みの飴玉をとりだした。
母親がくれたやつだ。
思い出にって普通こういう消費物渡すか？
ツッコミながらそれを破ろうとしたとき、いつのまにか前の席に小さい女の子が座っているのに気付いた。
物凄くキラキラした瞳で俺の手の中の飴を見つめてる。

「……」

俺はどうすべきなんだ。
とりあえず包みを破く手を止めてそっと差し出してみると、女の子は無言で飴玉を奪った。
そして、キラキラした瞳をさらにキラキラさせて俺ににっこり笑いかけてきた。

「ありがとうおじちゃん」

女の子は飴玉を両手に抱いてとてとて通路を走っていった。
呆然とそれを見ている俺。
何ていうか、最近のガキはスゲぇな。
やるとも何とも言ってないのに平然と持ってくし。
しかもおじちゃんかよ。
俺まだ二十代前半なんだけど。
ていうか悪いなまみぃ。
折角の思い出人にやっちまっぜ。
心の中で謝りながらぼーっとまた思考を飛ばしていると、袖が引っ

張られる気配。

「あ？」

視線下げるとそこにはさっきの女の子。
しかしこころなしか意気消沈してるように見える。
女の子はまた無言で手を差し出した。
幼い掌には俺がさっきあげた赤い包みが。

「お母さんが返してきなさいって」

少し不貞腐れた感じでぼそりと女の子が言う。

「怖そうなおじちゃんから物貰っちゃダメいけませんって」

おいおい親まで俺の事おっさん扱いかよ。
とんだ親子だな。

「だから、返す」

「……うい」

返す、と言われて受け取らないわけにはいかない。
手を伸ばしてそれを指で掴む。

「？」

あれ、これ……。

「内緒だよ。本当は優しいおじちゃん」

にっと悪戯っぽく笑った女の子は林檎の香りを漂わせていた。

「おうよ」

俺もにっと笑う。
女の子は満足そうに親の所へ戻って行った。
今度はそれを少し感心して見ていた俺。
手の中には空になった赤い包み。
何ていうか、最近のガキはマジでスゲぇよ。
キラキラした瞳で汚い大人をしゃあしゃあと騙すんだもんな。
ありゃ大人になった時したたかな人間になりそうだ。
怖そうなおじちゃんから貰った物返しても中身食ってちゃ意味ないってね。

少し嬉しい気分になりながら、俺はポケットに林檎味の飴玉の包みをしまった。

銀河鉄道（後書き）

まみぃのくれた思い出にはもう一つの思い出が重なったよ

ALIVE

電車が駅のホームにゆっくり止まって、そしてまたゆっくり動きだす。
これで八回目だ。
僕はつい一時間前からずっとベンチに座ってその様子を見ている。
何でそんな事してるかって？
闘ってるんだよ。
誰にも見えない心の中で。
この体の細胞一つ一つの生への執着とそれを正当化する理性が、死にたいと請い願うイカれた感情と。
頭はさぁ線路に飛び込めと体中に指令を出す。
けれど優秀な理性がそれを拒んで筋肉の動きを止めさせてるんだ。
また電車が入ってきた。
これで九台目。
巻き起こる風がホームを通り抜ける。

「何やってるの？」

僕は後ろからふわりと抱き締められた。
振り返らなくても誰かは分かる。

「また死ぬ事考えてたでしょう」

彼女のくすくす笑い声が僕の鼓膜を優しく打った。
いつもの鈴を鳴らしたみたいに澄んでいる笑い声だった。
何も言わなくてもそこまで分かっているなら頷く必要もないだろう。
僕は静かに瞳を閉じた。

「いつから見てた？」

「最初っから」

「マジかよ」

「マジだよ」

またくすくす笑い声。
僕も目を閉じたままふっと笑う。
彼女の長い髪の毛が僕の鼻にかかるのを感じた。

「死なないでね？」

きっと今彼女は顔を傾けている事だろう。

「どうかな」

「もう、これあげるから」

耳元で何かくしゃくしゃとビニールが擦れる音がした。
目を開くと飛び込んできたのは赤い色。
それと同時に人工的な甘い果実の匂いが鼻をくすぐった。

「飴？」

「そう」

「いつもの林檎味の？」

「そう」

「またかよ」

呟いて口を開けると、彼女は黙って飴をその中に投げ入れた。
甘い砂糖と林檎の混じった味が舌の上に広がった。

「元気出た？」

「もう食べ飽きたからなぁ」

「これは特別な飴なんだからね」

「例の列車のおじちゃん？」

「おじちゃんっていうかお兄さんだったけど」

「は？　何それ」

「おじちゃんって言ってみたらちょっとショックそうな顔してたから面白くって」

お前Ｓかよ。
言いかけて止めた。
彼女にそれを自覚させたらどうなるか想像がついたからだ。

「その人も災難だなぁ」

とりあえず無難な返事でかわしといた。
十台目の列車は止まらずにそのまま駆け抜けていく。

特急だろうか。
風を切る音と列車の走る轟音がやけにうるさい。
ふいに、ある光景がフラッシュバックした。
一人の青年がホームに立って今の僕のように列車を見ている。
眠たそうに、面倒臭そうに。
人生に飽きていたみたいだった。
あの青年が今頃どうしているのかなんて検討もつかない。
僕に死を意識させだしたあの青年が。

「今度は何考えてるの？」

風に舞っていた彼女の髪がまた僕の前に戻ってきた。

「死ぬ事なんじゃないの？」

彼女にあの青年の話をしても無駄だ。
そう考えて適当に誤魔化す事にした。
彼女は誰からも影響を受けない人だから、青年の話をしてもきっと笑われる。

「嘘吐きは嫌いー」

「じゃ、生きる事」

「大嘘吐きはもっと嫌いー」

けれども勘の鋭い彼女はなかなか騙されてくれない。
本当の事を言う気がない僕はともかく無口を決め込む。
しばらくするて彼女は再びくすくす鈴の音を鳴らし始めた。
此処まで綺麗な笑い声が出せるのは人間では彼女だけだろう、と本

気で思う。

「ねぇ。飴、おいし？」

「……まぁまぁ。」

僕は偽林檎を味わう。
そうして彼女の思い出を味わう。
彼女がいる限り、僕があの青年の立つ場所まで行く事はない。
だって僕はこんなに大事な鈴を持っているから。

ＡＬＩＶＥ（後書き）

くすくすくすくす、鈴の音は荒れた水面を落ち着かせてくれるんだ。

口笛

――――お前、なんか死にそう。

ついこの前、友達にそう言われた。
今にも死にそうな雰囲気を醸し出してるって。
何だよそれ。
笑い飛ばしてやったけど、実際どうなんだろう。
オレってそんな人生諦めてるっぽいのか？
そう思って、今日駅のホームに立ってみた。
もしオレが本当に死にたいと思ってるなら、気が付いたら飛び込んでるだろう、と。
列車の迫る線路の中に。
三本分立ち続けてみて、結果が出た。

オレは別に普通だ。

普通にそこら辺にいるただぼんやり日々を送っているだけの男なんだ。
列車がどれだけ目の前を通っても何も感じなかった。
それどころか落ちたら危ないなとさえ思った。

「……ありえないな」

オレはポケットから煙草を取り出して火を点ける。
そういえば少年が一人こっちを見ていたな。
彼もオレに死を見たのだろうか。
灰色の息を吐きだしながら、夕暮れに染まる町並みを仰いだ。
夕食時特有の暖かな雰囲気が景色を包む。

ぽつぽつ灯りだした灯りもまた同様に。
遠くから下手なブラスバンドの音楽と、野球児達の白球を追う若々しい声が聞こえてきた。
きっとオレの母校からだろう。

頑張れ若者

目を細めてもう一度煙草に口を付けた。
もうすっかり社会人なオレは胸いっぱいに煙を吸い込んで、のそのそ歩きだした。
土日をあけて明日からまた会社。
勤め始めて一ヵ月経つけどまだ新しい環境に慣れない。
順応性がないのだつまり。
軽い自己嫌悪に陥るのは青い春で味わい尽くしているんだけどね。
輪っか状の雲を吐き出して、さぁ頑張れオレ。
死にそうなんて言われないように。

口笛（後書き）

簡単に言うと五月病ってやつですよ。

a perfect sky

水泳の授業。
背泳ぎでプールを漂う。
あぁ気持ち良いこと。
この瞬間、私は全ての重みから解放されているのです。
重みってつまり重力のことね。
ついつい今吹奏楽部で練習している曲を口ずさんでしまう。
みんな水遊びに夢中で聞いてやしない。
体が沈まないようバランスをとりながら空を仰いだ。

「部長」

しかし同じ吹奏楽部のクラスメイトに空は遮られて見えなかった。
ちなみにこの子は副部長。

「なーにー」

いい陽射し避けになっている彼女に私は答える。
何とも冷静な視線がこちらに向いていた。

「あんまり大声で課題曲歌わないでください」

声色もまた冷静。

「なんでー」

私も負けじとさっきと同じ声色で返した。

「恥ずかしいからです」
しかし向こうは喋り方すら冷静に言ってきた。
「個人の自由じゃんかー」
「けどあなたは吹奏楽部の部長ですよ」
「自分は副部長でしょ？」
「だから歌ってません」
「下剋上だっ！！」
「意味のある発言をお願いします」

これ以上話しても勝てないと悟った私は身を翻して泳ぎだした。
どんなに破天荒なことをしようにも彼女にだけは通用しない。
さすが吹奏楽部の影部長。
壁に手がついたところ泳ぎを止める。
振り返るともう彼女はどこかに行ってしまっていた。
天敵がいなくなった気分だなぁ。
いや、別に嫌いじゃないっていうか好きだけどね？
あの子のこと。
先生の笛の音が響いてプールから上がれの合図。
私は渋々重力に満ちた地上へ戻った。
あの重みがまた与えられる。
どうしてこんなに地球は有機物も無機物も全部を求めようとするんだ。
わがままな。

歩を止めてもう一度空を仰ぐと今度はしっかりその青さも雲の白さも目に入った。
くそ、できればプールに飛込んでしまいたい。
空はすぐそこに見えるのに、掴めないのは地球が私を手放さないから。
月みたいに欲を少しは抑えなさい。
言ってやりたいけど残念ながらこの星に耳はなかった。
私の中のむしゃくしゃをどうしてくれよう。

「叫ぶのだけは止めてくださいね」

突然後ろから釘を刺されてぎくりとした。
見なくても背中に感じる絶対零度で誰かは分かった。
このままじゃ凍死する。
私はプールに未練を残しつつも更衣室に走った。
逃げる以外の対処を思い付かんのか自分。
今日も吹奏楽部の練習が大変そうだ。

a perfect sky（後書き）

人魚のように高く高く跳び上がりたいのよ。

少年ハート

昼休みになったので、野球部連中と集まり弁当を開いた。
みんなと言ってもオレを含めてたったの三人なのだが。
オレは一番後ろの窓際に座って包みをほどいた。
最初に目に飛込んでくるのは赤いリボンがトレードマークの三頭身猫。
百均で姉が買ってきた代物である。
本来女の子が使うもののはずなのに、サイズが無駄にでかいことからオレ用弁当箱にされた。
正直、というよりもうなんか普通に恥ずかしい。
これのおかげで今やオレはすっかりいじられキャラになってしまった。
みんなことあるごとにこの猫のグッズを見せては、欲しい？と聞いてくる。
初めのうちはオレもそれをされる度、うあー！と暴れ発狂して学校から逃げ出したくなったものだ。
しかし新しいクラスになって二ヶ月弱も経てば、仙人並の落ち着きを培ったオレもそれなりの対応ができるというもの。
今では欲しいかと聞かれても笑ってそれを放り投げるくらいの余裕を身に付けた。
オレは早々にふたを引っくり返して机に置き、唐揚げを口に放り込む。

「あ、そういや今日の七限目集会って書いてあるけど何すんの？」

向かいに座っている友達がふと聞いた。
こいつは体がやたらでかく、見た目の通りキャッチャーをやっている。

「ああ、アレだよアレ」
隣で牛の絵が全面に描かれた紙パックから牛乳をずるずる吸い上げていたサードが答えた。
「表彰式」
ころりとべこべこになったパックが机の上に転がる。
歪んだ牛の微笑みが何だかやけに痛ましい。
そもそもこれは小学校低学年をターゲットに売られている牛乳だった気がするのだが。
「表彰式って誰を？」
オレは噛み砕いた鶏肉を飲み下して首を傾げた。
サードはアイツだよアイツ、とパンの袋を破く。
「アイツじゃ分かんないって」
「ほら、吹奏楽部の部長」
「吹奏楽部の部長？」
「あ、俺それ知ってる。二組のあの変な女子だろ」
「そうそう」
「だから誰」

「こないだ新聞載って騒がれてたじゃん。お前見てねーの？」
キャッチャーの新聞、というヒントにオレは記憶を巡らせた。
確かにこの学校の誰かが有名な国際コンクールかなんかで優勝したとかで、先生たちが興奮していた日があった気がする。
これで学校の名があがるとか何とか。
すごく馬鹿らしいことしか言っていなくて正直かなり軽蔑した。
だって優勝したその子は自分がやりたいからやって、優勝したのだろう。
いくら人に言われからって、自分にやる気がない人がそんな著名なコンクールで優勝なんて出来るわけがない。
きっとその子には努力し続ける根性と、それに見合った才能を持ってただけなのだ。
どうしてで大人はそんな単純なことを喜ばないでおかしなことにばかりにしか注目しないのだろうか。
理解したくもない。

「おーい？」

肩を小突かれてふと現実が帰ってきた。
目をぱちぱちさせて隣を見ると不思議な顔をしたサードが同じく目をぱちぱちさせていた。
中途半端に持ち上げてしまった箸が宙をさ迷う。
仕方なしに不時着した先は甘い卵焼き。

「どうかしたか？」

「は？　あ、いや。ちょっと思い出してた」

「……思い出すだけにしては大分意識とんでたぞ」

「え、そんなに？」

疑うように頭をかきながらも、オレは実際意識が完全にどこかへ行っていたことを自覚していた。
ひとつを考え出すと止まらなくなるのだ。
小さいときからそうで、聞けばいきなりぼぉっとしだして家族を心配させたらしい。
また意識を飛ばしそうになってることにはっとしたオレは卵焼きの上に置いたままだった箸に力を加えた。
箸先はあっけなく卵焼きに刺さる。
そういえば今朝、オレは職員室の前で呼び止められたことを思い出した。

「……あ！　監督からの伝言！」

急に叫んだので二人はびっくりして危うく持っていたパンを落としかけた。
クラスの人数名もこちらを振り返ったので少し声の調子を低くする。

「明日はＯＢが一人来るから早めに集合だって」

「え、ＯＢって誰？」

サードが裾を引っ張ってきた。

「知らない。でも今年社会人なりたてだって」

「今年社会人なりたてってオレらが小六のときの卒業生じゃね？」

「うん。
「何でいきなり来んだよ」
「さぁ。五月病克服するのがなんたらって言ってたけど」
「てか別にどうでもよくね？」
「俺はどうでもよくねぇ。明日は数学の再テストがあるんだ」
「そんなもんサボっちまえサボっちまえ」
「もう三回サボってんだよ」
「つーかサボっちゃだめだろ……」
うちの野球部は集合時間に人一倍厳しいので、放課後の用事をすっぽかす奴も少なくない。
余談だが、コイツを含めた歴代のサードは何故か部で一番のサボり魔ばかりだ。
「じゃあお前明日時間キッカリに来いよ！」
サボり魔サードがびっと指を指してくる。
このとき、ああ来てやるぜと男らしく言えたならどんなに良かっただろう。
しかしここでオレは首を横に振った。
何故なら。
「明日オレは法事で学校来ません。残念ですが」

「はぁ！？」

「あ、まじ？」

興奮気味に立ち上がるサード。
対するキャッチャーはパンをかじりながらふんふんと頷いている。

「何だよ、お前だけ逃げんなよ！」

サードの大声が教室中に響いた。
今度は数名でなくほとんどの人がこちらを見たのでオレは急いでサードを座らせる。
大体逃げるって何からだ。
イスにどっかり座り込んだサードはビニール袋をくしゃくしゃに丸めて、ふん、と鼻から息を出した。

「そもそもなー、法事つったってどうせ顔も見たことないひいじいさんとかそんなんだろ？　それにかこつけて休むとかずる休みも甚だしいっつーの」

「別にいいんじゃん。お前なんかしょっちゅう偽病欠してんだから」

「え！？　あれって嘘なの！？」

「うるせぇそこ」

思わぬ事実を聞かされオレは軽いショックを受ける。
箸先の卵焼きをまっ二つにしてしまったほどだ。

「あーそういや来月から水泳始まるな」

「おいごまかすなって。こいつ結構驚いてんぞ」

キャッチャーに頭を叩かた。

振り払わずに半分になった卵焼きを片方食べる。

休んだってもう二度とノートなんて見せてなんかやんねぇからな。

口の中で呟いて、オレは残った弁当をかきこんだ。

少年ハート（後書き）

とか言いつつ見せちゃうからいじられ脱却できないんだけどね

ニシエヒガシエ

季節の移り目は似てるようで違う。
例えば、夏は秋へこっそりと姿を変えるし。
秋は冬へと急激に身を落として。
冬は春を穏やかに迎え入れる。
そして今。
春は世界に色をもたらした後、役目は終わったと言わんばかりにあっさり季節を夏へ手渡した。
その変化にほとんどの生き物はすんなり順応しているにも関わらず、何故か人間だけはそれについていけない。
不思議なことだ。
人間は生き物としてカウントされていないのか。
確かによくよく考えれば、人間ほど自然に対して何も生産しない生き物もいない。
馬鹿みたいに全てを食い散らかしてその後はそのままほったらかしなんだ。
人間は必ず自分だけが大事だから。

「ま、これが僕の持論なんスけど」

「へーぇ」

やる気のない返事が耳に届く。
いかにもかったるいといった感じの声だ。
隣室では法事の最後の締め括りとして大人達が宴会を開いていた。

「ちょっと何スかそれー？　もう少しちゃんとした反応して下さいよ」

「ぁあ？たかだか十六、七しか生きてねぇガキの開いた悟りなんかいちいち聞ぃてらんねぇよ」

「なっ、そっちだってまだ二十代後半じゃないスか」

僕は畳の上に並んで足を投げ出して座っている坊主に顔を向ける。
と同時にスパンと頭を叩かれた。

「社会に出てからの十年舐めんじゃねえぞ」

「……痛ぇ」

頭を押さえて、叩かれた衝撃で下がった視線を持ち上げる。
最初に袈裟の黒が目に入り、次に銀のピアスが輝いた。
右耳しか見えないこちらからでは三つの銀色しか見とめられないが、向こう側の左耳にはさらにもう二つピアスが刺さっているはずだ。
また、出家する前は地元で頭をまっ黄色にして相当なヤンキーをやってたらしい。
以前本人が言っていた。
これでこの寺の神主サンの孫だっていうんだから世の中おかしなもんだ。
開け放された障子の先に広がる境内の風景に僕は視線を戻した。
日毎少しずつ強さを増す太陽の光に照らされた境内は影を求めて寺の中に逃げ込んでいても眩しいと感じる。

「……お祖父さんとの奇跡の出会いができてなかったら、今の僕と大した人生経験の差なかったと思いますけどね」

反射する陽光を遮るように片目を瞑って僕は憎まれ口を叩いた。

また頭を叩かれると思ったが、今度は何も飛んでこなかった。

「確かになぁ……」

代わりに聞こえたのはやる気のない声。

いや、どちらかというと感慨深い、て感じだ。

僕は何と返事をしたものかと膝を曲げて両腕に抱き込み、同い年の従兄弟が親戚の小さな子達と追いかけっこをしているのをただじっと見つめた。

天然入った従兄弟のぼっちゃんは楽しそうに走り回っていた。

野球部らしいので体力は有り余っているんだろう。

親の勝手な言い分で行きたくもない進学校に行かされた僕としては、好きなことを自由にしている従兄弟が羨ましくてたまらなかった。

この人だってそうだ。

僕は隣を横目で見る。

この人は若い頃、親泣かせなことを散々した割りに、その両親とはあっさり和解。

親友に言われた言葉を契機に上京し、ふらふらして何となく入ったこの寺の神主サンが実の祖父だったそうだ。

この人のお父さまは寺を継ぐのが嫌で駆け落ち同然にお母さまと結婚し、そのまま音信不通だったらしい。

運命的な出会いの相手が腐りかけのじじいじゃなあ。

そのときは苦笑してそうこぼしていたが、声色はどことなく満足そうだった。

そしてこの人は出家した。

過剰なまでに似合っていると自負していた金髪を剃り上げて。

「……羨ましっスよ」

僕にはそんなことできない。

親に言われるがまま机に向かい、親が望む通りの成績を取り。
何一つ自分でやりたいと決めたことはなかった。
それは楽なことでもあるけれど。

「オレの友達にも今のお前みたいな奴いるぜ」

「え？」

急に言われて僕は首を起こした。
知らず知らず膝に乗せていたアゴにズボンの跡がついている。

「そいつこの春まで大学生だったんだけどな、いっつも面倒臭そうにだらだらしててよぉ。やっとこの間どっかの企業に採用もらって社会人になったんだよ」

「はぁ」

「そしたら今度はその面倒臭そうさにさらに磨きがかかってな。一時期コイツ本当に自殺するんじゃねぇかって本気で心配になった」

「その人、自殺しちゃったんスか？」

「いんや。五月病だとよ」

「……」

「あ！お前今オチね～って思ったろ！」

「えっ？　ま、まさか」

「嘘つくな！　ったくなんだよ、人が心配してやってんのに」

「心配、スか？」

僕は少し驚いて目を瞬かせた。
オレが誰かを心配しちゃ悪いかと尊大な態度を見せるこの坊サンに、年に一回会うか会わないか程度の僕を気にかける心があるなんて。
言っちゃ悪いが端塵も思えなかったからだ。

「何か、……予想外だ」

「人を見た目で判断すんな」

「や、確かにそうなんスけど」

まだ目をぱちぱちさせていると、頭を叩かれた。
本日二度目。
さっきよりは力弱めだったのかそんなに衝撃はなかったが、痛いのに変わりはない。
これ以上僕の脳細胞を壊さないで下さい、と言おうとしたら、赤い包み紙が目の前に現れた。
りんごあじと平仮名で書かれてある。

「やるよ」

差し出した本人はすでに口をもごもごさせていた。
僕は何も言わないでそれを受け取り袋を破く。

「親が全てじゃねぇんだからな」

小さく、声が聞こえた。

「お前が自分だけで歩ける日なんてすぐ来るんだからよ。忘れんな」

親に縛られて、息苦しい毎日に飽々していた。
操り人形と言ったら少し言い過ぎかもしれないけど、それでも目の前にはいつでも両親の敷いたレールがある。
僕の役目はそこを外れないよう進むだけ。
ただ、それだけ。

「……はい」

この人は気付いてくれた。
僕の中の小さな諦めに。
そして摘み取ろうとしてくれたんだ。

「ありがとう、ございます」

相変わらず日射しは緩やかに強い。
従兄弟みたいに僕はまだあれを真っ直ぐ浴びる気にはなれないけど。
頑張ろうと思った。
気付いてくれる人がいたから。

ニシエヒガシエ（後書き）

養われてる間はおとなしくレールをそれないでいてやろうじゃないか

PADDLE

春も終わりかけで日差しが中途半端に鋭くなりつつある今日この頃。
学校は恐ろしく退屈で、死にそうだった。
ぼくはスケッチブックの入ったバックを肩に下げ、足元に慣れ親しんだ野良犬をまとわりつかせながら歩いていた。
行き場所は決めてない。
のらりくらりってほどじゃないけどぼくはふらふら行き場所を探すのが好きなんだ。
犬はさしずめお供か。
だからってこれにさらに雉と猿がやってきても鬼ヶ島には行きたくない。
きびだんごも持ってないし。

「あれ」

今日は近くの寺にでも行こうかなと歩いてたぼくは見えてきた目的地に異変を見つけた。

「今日は法事でもやってるのかな……？」

いつもはしない生きてる気配が寺からしてくる。
ひっそりとしてはずなのに、今日はやけにのびのびとしてる感じっていうのかな。

「困ったな」

ぼくは足元の犬を撫でた。
すっかり寺に行くつもりになってたっていうのにな。

今更ほかの場所に行きたくない。
今日は寺から見える町並みをスケッチしたかったんだ。
わんと犬が鳴いた。
ぼくの胸中を察してくれたのかもしれない。
コイツは野良犬のわりに頭が良い。
ぼくは背中に手を置いたまま話しかけた。

「どうする？　もうスケッチはやめて一緒にアイスでも買い行く？」

確か近くにコンビニがあったはずだ。

「まぁお前は店の外で待ってなきゃいけないけどな」

どうする？と最後にまた聞こうとしたら、いきなり犬はぼくの手を離れて走り出した。
鳥居目指して一直線。

「ちょっ、寺には行かないんだって！」

ぼくは目を丸くして叫ぶ。
お前今さっきぼくが行ってたこと聞いてなかったのか？
でも当然犬は足を止めてくれなくて、仕方なくぼくも犬にならって走り出した。
スケッチブックの入ったバックが肩からずり落ちそうだ。
やっと追い付いたとき、犬は寺に続く石段を登ろうとしていた。

「だーかーらー駄目だったらー。今来てる人達に迷惑だよー」

言ってみるけど犬は聞耳無しってことで。
コノヤローぼくがあのときハンバーガーあげなかったら、お前今頃

ここにいないで餓死してたんだからななんて悪態を吐きつつ、実のところぼくも寺から望む風景を諦めきれないでいた。

「まったく……ちょっとだけだぞ？」

ぼくたちはゆっくり石段を登りはじめた。
少しだけ茂った木々が日陰をつくり、夏になりきれてない空気はまだ寒いくらいだ。
気持良い。
冷たさがぼくの体温を教えてくれる。
学校でも家でも絵しか描けない能無しでも、ぼくは体温を持ってる。
根暗がなんだ。
ぼくはお前らと話してるより犬に話しかけたりカンバスに向かってる方が楽なんだよ、くそう。
根暗で何が悪いんだ。
唇を突き出して眉をしかめていたら、不意に日差しが戻ってきた。
石段を登り終えたんだ。

「あ、れ」

わんと犬が足元で鳴いて、ぼくはいつもと違う境内の姿に呆然とした。
生きてる。
人の息づきがある。
ただ普段よりは人がいるってだけの違いなのに、こんなに違う。
すごいことだ。
同じなのにそれだけで変わる風景もあるって、初めて実感した。

「スケッチ……ッ」

ぼくは思い出したようにバックからスケッチブックを引っ張り出した。
この情景をスケッチブックに写さないで世界の何を写せっていうんだと、本気で思った。
後ろに広がる町並みなんてもう頭になかった。
４Ｂの鉛筆も一緒に出そうとしたけど見付からなくてバックを除き込む。
あったあった。
犬のわんという鳴き声に顔をあげてまた境内に視線を戻した。
人が寺から出てきたところだった。
三人。
そのうちの一人がこっちを見る。
やる気のないぼんやりとした目が。

「やば……」

逃げないと。
とっさに思った。
場違いな自分を見咎められたくない。
溢れていた意気込みはどこかに瞬間移動してしまった。
他の二人にも気付かれる前に、逃げよう。
なのに、それを阻むみたいに突風が吹いた。
短くはないぼくの髪がなびいて、隠れていた両耳が日の下に晒される。
隠していた秘密も一緒に。

「！！」

驚いて耳を塞ぐように押さえてぼくは石段を一目散に駆け降りた。
一瞬名残惜しく振り返った境内の情景には、まだあの三人がいた。

袈裟と、黒い学ランと、紺のブレザーが網膜に焼き付く。
それと、代わらずやる気のないぼんやりとした目も。
いいなぁ。
くそう。
ああいう虚無に満ちた目つき。
何でも出来るはずなに何にも出来ないで諦めてる色だ。
いいなぁ。
何でも出来るくせに絵しか描かないぼくには縁遠い。

「おいワンコ！　早いって！　ぼくを置いてくなっ」

伊達に犬じゃないって速さで遥か前を走る犬にそう呼び掛けても、
やっぱり聞耳はない。
あの制服どこだっけなぁと足を動かしながら考える。
隣にいた方の学ランは吹奏楽で有名な高校のとこのだ。
確かこの間そこの部長が国際コンクールで優勝してなかったっけ。
じゃああのブレザーは、県下一って言われてるの進学高の制服かな。
ちなみにぼくの学校は何の取り柄もない中の中。
だったらどうなんだってかんじだけど。
いい加減両手を耳から離しすと、金具に髪が絡まってしまっていた。
もう面倒だからこのまま犬を追い掛けよう。
今日は何でだかどこまでも走れそうな気がする。
今度は風がぼくを後押しするむたいに吹いて、たまらなく気持ち良
かった。
瞬間移動した意気込みが戻ってきたようだ。
ああ！
一晩中かけてあの情景とこの気持ちを目に見えるものにしてしまい
たいや！

「ねぇ、今夜はぼくに付き合ってくれるよね、ワンワン！」

根暗がなんだ。
ぼくには筆が持てるんだ。
他に何でも出来るけど、今のところ絵を描く以外何もしたくない。
それでいいんだ。
犬がわんと鳴いてぼくを振り返って、嬉しそうに舌を出す。
まるでぼくの胸中を読み取ったみたいに。
頭がいいからお前は野良犬なのか？
人語でそうだよと答えそうだったので、ぼくは問いかけずに足を必死で動かした。
そういえばあのお坊さん、お坊さんなのにピアスしてた。
変なの。
でも、ぼくと一緒じゃないか。
隠した秘密。
知ってるのはぼくとこのワンコだけ。
楽しいな！

PADDLE（後書き）

楽しいことがしたいから楽しいことしかしないんだ。

リリィ

窓を開けたら冷たい空気が流れてきた。
暖房が効きすぎて暑い車内でこの風は気持ちが良い。
目を閉じて顔のほてりを冷ましていると、ふいに梅の香りが鼻先をかすめた。
反射的に目を開けてみたらちょうど目の前を白い花を咲かせた梅の木が通りすぎたところだった。
あたしは隣でハンドルを握る姉に声をかけた。

「お姉ちゃん」

「なに？」

「あのさぁ上の階で犬飼ってる人いるじゃん」

「いるね」

「あの人ついにバレたみたいだよ。管理人さんに」

「まぁペット禁止だからね。うちのマンション」

姉は気の毒にねと呟いて、わざとらしくあーあと溜め息をつく。

「お姉ちゃん」

「ん？」

「思ってないことはわざわざ言わなくて良いよ」

「バレたか」

「バレたよ」

姉は分かりやすく舌を打った。
そのくせ悔しそうじゃないからこれも形だけの反応なんだろう。
姉はなんでだか無駄なリアクションをしたがる。

「でもさ、全部嘘じゃないんだよ」

あたしはへっ？首を姉に向けた。
ちょうど十字路を右に曲がるとこだった。

「ホント気の毒だよ、犬が。人間の身勝手で好き放題されて」

「……そうだね」

「特にあの子は頭が良かったのに、気の毒」

「ああ、あたしよりは賢かったね」

「ついでに言うとあの飼い主よりもね」

「そだね」

あたしは犬につけられていた超絶趣味の悪い紫の首輪が思い出した。
どこを探せばあんなものが見付かるんだろうと本気で考えてしまう
くらいの趣味の悪さだ。
あれと同じものを探し出すのと世界中の指名手配凶悪犯を逮捕する

のだったら、どっちが簡単だろう。

「頭とセンスが悪いやつは嫌いだな」

あたしは暖房のスイッチを切って窓を閉めた。

「あらら？」

すると姉がこっちを横目で見て意地悪く言ってきたので、あたしは何、と声のトーンを落として返した。

何が言いたいのかなんて聞かなくても分かる。

「それじゃあアンタ自分のこと嫌いってことになっちゃわない？」

そらきた。

「はいはい、センス悪くて悪かったですねぇ」

あたしはげんなりしてそう言い返した。

センスの良い姉は何かにつけてあたしのファッションをからかってくる。

「あたしはお姉ちゃんみたいにお洒落じゃないから」

「ちゃんと分かってんじゃん」

「うっざ。このくそナルシ」

「ナルシのどこが悪いのー？」

あたしは顔をしかめた。
姉はこうやって開き直ってるから性が悪い。
自分に与えられた才を余すとこ無く理解し、誇り、利用している。
すごいなと思う。
姉は間違いなく人生の勝ち組だ。

「そういえばさぁ、アンタ弁護士の資格ちゃんと取れんの？」

大分街中に近付いたところで、思い出したように姉が口を開いた。
もう梅はどこにも見えない。

「いや弁護士の資格っていうか、司法試験ね」

軽く訂正をする。

「どっちでも同じじゃん」

「違うって。司法試験合格しただけじゃ弁護士なれないから」

「お姉ちゃんよく分かんなーい」

「・・・あっそ」

じゃ聞くなよと突っ込みそうになって思い止まった。
よく考えれば姉は別に聞いていない。
単純に弁護士にはなれるかと聞いたのだ。
あたしはあーとうめいて髪を撫でつけた。

「まぁぼちぼちかな。このまま頑張ればいけると思う」

すると姉はそう、と満足そうに言って窓の外に視線を移した。
運転中に危ないな。
そう思って注意しようとしたら、いきなり体が見えない手に押し出された。
首がガクンと振れる。
重力という重力が全身にかかった。
姉が急ブレーキを踏んだのだ。
ギリギリのところでシートベルトが引っ掛かって、何とかあたしはフロントガラスとの衝突を免れた。
驚きと食い込んだベルトのせいで少しの間息が止まる。

「……っ、お姉ちゃん！」

あたしは運転席に向かって叫んだ。
後続車がいなかったのがせめてもの救いというか。
しかし姉はけろりとした顔であたしとは逆方向に顔を向けていた。

「ちょっとぉ」

むかついて呼び掛けたら、姉はあれ、と窓の外を指差した。

「バスケやってる」

言われてそっちに目をやると、確かに若者たちが数人錆び付いたバスケットゴールの周りで熱戦を繰り広げていた。
悪い予感がする。

「まさかお姉ちゃん……」

「そのまさか」

予感は的中したらしい。
姉はにやりと笑ってドアを開けた。

「車動かしといてね」

閉め際に鍵を投げてくる。
動かしといてねって、あたし免許持ってないんですが。
まぁ動かし方は知ってるけど。

「早く帰ってきてよー」

一応程度に言っといて、あたしは鍵を挿してエンジンをかけた。
学生時代バスケをやっていた姉の腕は今でも並以上。
果たして彼らは突然の乱入者に勝てるだろうか？
あたしは駐車禁止の注意を受けないうちに車を発車することにした。

リリィ（後書き）

憧れはいつだって隣にいるのです。

Monster

ようやく半袖でも大丈夫な気候になってきた。
月の明るい夜、俺はフェンスに区切られた一面分もないバスケットコートの真ん中に立って、膝をゆるく曲げた。
ボールを持った両手を眼前まで寄せて、狙いを澄ます。
息を吸った。

「綺麗」

投げたボールは真っ直ぐリングに入る。
俺はイェイと脇のベンチに座っている彼女にピースを向けた。

「すげーだろ」

「だから綺麗って言った」

「好きな子にはいくらでも褒めてほしいんだって」

転がってきたボールを拾って彼女の元へ駆け寄る。

「それに俺ブランク丸二年だぞ？　それであのフォームはすげーって」

「最近また友達とバスケし出してるって聞いたけど」

「……誰に」

「知らない」

彼女はいつも通りのそっけない態度でそう返して俺の持つボールに指を伸ばした。
細く長いその指はさすが楽器をやってるだけあって綺麗だ。
俺のフォームより格段に。

「いる？」

中学から愛用してるボールだけど、欲しいならあげよう。
そう思って俺はボールを差し出そうとした。

「いらない」

しかし彼女はあっさり言い放つ。

「いらないってひでー」

「ちょっと触ってみたくなっただけだから」

「やっぱアレとは違うの？」

「アレ？」

「チェロ」

「あ、うん。もちろん。こんなにボコボコしてない」

「ボコボコ……」

まぁ確かにボコボコしてるわな表面。

つーかボコボコしてる楽器ってあんの？

「どうして？」

「え？」

いきなり投げ掛けられた疑問に俺はボールから彼女に視線を戻す。

「ああ、ごめんなさい。主語忘れてた」

掌で額を押さえて彼女は珍しく溜め息を吐いた。

どうしてまたバスケを始めたのって意味、と小さく付け加える。

「あーなるほどね。いや俺の友達にバスケやってるのがいんだけどさ、この前街の中でバスケが超上手いネエちゃんに会ったらしいんだわ」

「超上手い……？」

「そ、超上手い」

説明しながら、そう話してくれた友人を思い出す。

悔しいような、嬉しいような。

そんな表情でそいつは頬を緩ませていた。

『もう一回勝負してぇな』

多分そいつは嬉しかったんだろう。

機嫌が良いときに右眉上の古い傷跡を触る癖が、最近よく見られたからだ。

「で、俺もそいつに付き合ってまたバスケしてんの」
俺はそう言ってボールを小指に乗せてくるくると回した。
釘付けになってる彼女の姿が可愛い。
こんなに可愛いのに学校では吹奏学部の副部長やっちゃってんだからすげーよなぁ。
まぁ副部長ってのがどんくらいすごいかはよく分かんねーけど。
とにかくすごいってことにしとこう。

「あ、てかさ、何で部長になんなかったんだ？」
俺はふと思ってボールを回す手を止めた。
そうだよ、部長なら確実にすげぇじゃん。
だって一番だし。
爛々とした目を向けると、彼女はすごく冷静な声で返してきた。

「実力です」
冷静っていうか、もう冷たいくらい。
わお、懐かしい。
俺と出会った頃もこんなかんじに冷たくて、ですます口調だったな。
懐かしむ俺をよそに、彼女はベンチから立ち上がってゴール下まで歩いて行く。
ゆらりと吹いた風で広がろうとする髪をそっと手で押さえる。

「あの人はずるいから」
目を細めた俺に、彼女は言った。

「あの人は誰の為にも生きてない。ただ自分の為に生きてる。呼吸をしてる。いつでも自分に自信を持っていて、自信を持つことが人として当然みたいな顔をしていて。そして、その自信に見合うだけ実力を持ってる」

「あの人って、部長さん？」

「そう。……もうすぐある国際コンクールにも出るらしいけど」

彼女は眩しそうにリングを見上げた。

「きっとあの人は一番になる」

まるでそれが確定した事実みたいに言うもんだから、俺はそれを確定した事実だと思ってしまって、ついああと声をもらしていた。

「天才なんだなぁ、その部長さん」

すると、彼女は嬉しそうに微笑んでこっちを見た。

「でも、不思議な所は少し貴方に似てるかも」

「え？　俺不思議っ子？」

手にしたボールを下に落とすと、ボールは地面を嫌がるように跳ね返って俺の手の中に戻ってきた。

それとももっと高い所に跳びたいんだろうか？

跳びたいんだろうさ。

俺はボールを掲げて彼女に笑いかける。

「そっちだって結構不思議っ子だと思うぞー」

投げたボールは真っ直ぐリングに飛んで行った。

Monster（後書き）

愛する人から愛をもらえるなんて、なんてすばらしいことなんだろう。

奏

後ろでまたバスケットボールがリングをくぐる音がした。
あたしは腕に抱えていた膝から顔を上げる。
濡れた膝に空気が触れて、冷たかった。
喉から嗚咽が漏れる。
鼻をすすり、あたしは後ろのブロックから背中を離した。
灰色のブロック塀は、座ったあたしの肩より少し上ぐらいの高さしかない。
そのため、体育座りで頭を伏せていれば、あっさり塀の影に隠れてしまうことができるのだ。
そのブロック塀の上には鉄のフェンスがそびえている。
あたしは軽く腰を浮かして後ろを振り返った。
夜のバスケットコートを照らすライトが眩しく涙でうるんだ目に染みる。
まだあの二人はいた。
多分もう一時間近く、ここでお喋りをしてるはずだ。
よく飽きもせず、そんなに一緒にいて何が楽しいのか。
二人から伸びる長い影は仲良さそうに寄り添って、嬉しそう。
あたしは嬉しくない。
あたしに寄り添ってくれる人はいない。
そう思うと、また涙がこぼれた。
嗚咽も漏れる。
指がすがるように目の前のフェンスを掴んでいた。
フェンスにしかすがれない自分が悲しくて、いっそ叫び出したい気分だ。
誰か、あたしの涙に気付いてよ。
思わずポケットの中の携帯に手を伸ばしかけるけど、すんでのところでやめた。

携帯を開いても何も変わらない。
誰とでも繋がれるから、誰かが助けてくれそうな気がするけど、助けてくれるような誰かが、あたしにはいないから。
すごく情けないことだ。
今まで生きてきて、あたしは迷惑も省みずに泣き付ける相手も見つけられてないなんて。
フェンスの向こうのあの二人みたいに、愛する人だって、愛してくれる人だって。
惨めだ、惨めだ、惨めだ。
あたしはフェンスから手を離してその場に蹲った。
黒いアスファルトは、ブロックが作りだす濃い影のお陰より真っ黒。
あの二人はライトに照らされてるのに、あたしは影の中。
ちょうど良いじゃん。
お似合いだよ。
なんて、言えるほどあたしはまだ自分を蔑めないていない。
プライドは一人前って、どんな悲劇。
ふっと息が口の端から漏れた。
ここまで独りでぐだぐだ泣いときながら、まだ自分を揶揄する余裕が残ってることが馬鹿らしかった。
今度は大きく息を吐き出す。
胸の奥を締め付けていた痛みが軽くなる。
お母さんは、あたしがまだ塾にいると思っているんだろうか。
ふと、落ち着いてきた頭にそうよぎった。
嗚咽は止まってないけど、鼻の内側の通りがちょっとだけ良くなったような気がする。
塾なんてとっくの昔に終わっていた。
いつもなら、そのまますぐに家に帰って晩御飯を食べてる予定だ。
でも、今日は無理だった。
心が異様なまでに無理だと叫んだ。
今は家に帰れない、お母さんに会いたくないと。

あたしは鼻をすする。
たまに、お母さんの愛をまとわりつくようだ、と感じるときがある。
濃い、煮詰まった愛。
あの人はそんな愛情をどこまでもあたしに与え続けてこようとするのだ。
それこそ、あたし以外に与える先を失ったように。
けど、あたしはそれをいつまでも受け止めることが出来るほど、もう子供ではなくなってきていた。
絡み付く愛は、あたしの体を重くする。
どろどろどろどろと、そのままあたしはどんどん動けなくなっていきそうで、煩わしい。
それでもあたしは何とか今までやってこれた。
時にお母さんのそんな愛をまだ嬉しく思える余裕だって残っていた。
愛されている、あたしは幸せな子供なんだと。

「なのに……」

嗚咽まじりに出た声は鼻声。
そうだ。
それなのに、お母さんはお父さんを愛していない。
お母さんはあたしにあれだけの愛を与えるのに、お父さんには一滴だって与えようとはしない。
お父さんにあげたくないんだ。
そうなんでしょ、お母さん？
だからあたしに全部くれるんでしょ？
握った掌に爪が食い込む。
ねぇ、欲しくないよ、あたしは。
元からそんなに望んでないよ、横取ってまで欲しくないよ。
皮膚が切れそうな痛みに、あたしは指の力を抜いた。
でもお母さんはあたしにくれるのを止めてはくれなくて。

断ったら、ほら、怒り出す。

「大丈夫、大丈夫。何も考えなくて大丈夫……」

またせりあがってきた涙を必死に拭って、あたしは自分に囁いた。
大丈夫だよ、大丈夫だよ、泣いたって、何の意味もないよ。
そうやって、自己暗示。
あたしを助けるのはいつでもあたし。
寄り添って、涙を拭いて、大丈夫と言ってくれる人は誰もいないから。
いるかもしれないけど、あたしには見付けられないから。
悲しいね、情けないね、惨めだね。
あたしは大きく息を吐いた。
そっと顔をあげて、ブロック塀に手をかけて、フェンスの向こうに目をやる。
伸びる二つの影は寄り添って、なんて幸せな光景なんだろう。
ふいに、ある言葉が頭を過ぎった。

「笑いたいとかは笑えばいいんです、泣きたいときは泣けばいいんです、か」

教えてくれたのは誰だったか。
多分、友達。
担任の先生が言っていたとかなんとかで。
ありがとう、と口の中で呟く。
君自身があたしを助けてくれるとは思ってないけど、君の言葉は偶然にもあたしの心を、気休めではあるけど、楽のしてくれたよ。
もう少し泣いたら、笑って家に帰ることにしよう。
そうすればまたお母さんの愛を黙って受け取れると思うから。
あたしは立ち上がって、脇目も振らず走りだした。

あの二人はあたしに気付いただろうか。
あたしがずっとあそこで泣いていたことに気付いてくれただろうか。
嗚咽が漏れる。
鼻をすする。
あたしは、あたしが独りであそこにいたという事実を、せめてあの二人にだけでも知っといて欲しかった。

奏（後書き）

それくらいの身勝手は許してよ。

supernova（前書き）

さて、仕事でもしようかな。

supernova

夜、風呂上りにベランダに出てみたら、見渡した先に面白いものを見つけた。
いや、これを面白いと言ってしまったら怒られるかもしれない。
ともかく私は、蹲って泣いている女の子を見つけたのだ。
このマンションの隣にあるバスケットコートの外側で、塀の影に沈むように、縮こまっている。
四階のここからでははっきり分からないけど、制服からして多分高校生だ。
今の時間だと塾帰りか何かだろう。
ベランダの柵に肘をついて、私は手にしたビールを一口啜る。
職業柄、ああいった自分とは無関係な（けれど興味深い）モノを観察して、あれこれ考えをめぐらすのが癖になっている。
いっそ趣味と言ってもいいかもしれない。
想像力を働かせることは楽しい。
私はビールを柵の上に置いて目を瞑り、眼下の彼女に意識を向かわせる。
何かいやなことがあったんだろうか。
あんな風に泣いているんだから、まさか嬉しいことがあったわけではあるまい。
いつ起きたか。
普通考えられるのは二つ。
学校か、塾だ。
学校なら何で放課後に泣かない？
もしかしたら学校が終わってすぐに塾があって、泣けなかったんだろうか。
もしくは塾で勉強をしている間に、あれは泣けるほど辛いことだったんだと、気付いたのかもしれない。

塾であれば、その帰り道で泣いていても何もおかしなことはない。
さて、折角だから、もう一つの可能性もあげてみよう。
辛いことは、家で起きたのかもしれない、ということだ。
そうであれば家に帰らず、わざわざあんなところに座り込んで泣く理由にもなる。
とは言っても、その泣いている原因が学校や塾のいじめなんかであれば、親を心配させたくない（もしくはいじめられている事実を知られたくない）からという理由も成り立つ。
家が原因なら、まあありがちなところ親との不和、または親自体が不仲、このどちらかだろう。
個人的には親の不仲の方が望ましい。
親の身勝手な理由で、愛されるべき子供が人知れず泣かなくてはならないなんて、心が引き裂かれそうに痛むじゃないか。
もし本当にそうなのであれば、私は彼女の両親を嘲笑したい。
馬鹿な、くだらない人間め、とでも。
こんなことを口に出すから、私は数少ない友人たちにさえ変態と呼ばれるんだろうか。
いやだな、風変わりだと言ってほしい。
私は目を開けて、ビールに手を伸ばした。
指先の表面を冷たさが滑る。
しかし、飲んでがっかりだ。
缶は冷たいのに中身はすっかり温くなっている。
がっかりだ。これほど落胆したのは久しぶりだ。
ああもう、本当にがっかりだ。
おもわず缶ごとビールをベランダの外に投げ落とそうと思ったが、私はすぐにはっとして、振り上げた腕を下ろした。
この間それを実行したところ、この部屋の下にある一階の部屋の住民に、庭掃除をさせられたのだ。
きつくなりだした日差しの下で、一日中あの労働。
比較的自由のある私の仕事を知っての報復だ。

くそ、おぞましい。
女の私になんて容赦の無い仕打ちをするんだ、あの人は。
もうあんな目には会いたくない。
私はビールを今度は床に置いた。
いつの間にか、思考が反れてしまったようだ。
気を取り直して女の子に視線を戻すと、動きがあった。
女の子は顔をバスケットコートの中に向けて、カップルらしき二人を見ていた。
コートに立つ二人は、なにやら親しげに会話を交わしている。
私は口元を右手で押さえる。
女の子とその二人は、まるで対照的だった。
幸福、という観点に置いてだ。
眉に皺が寄る。
思考があっという間に置いていかれてしまったことに気付いた。
もうだめだ、想像がもうとんでもないところにまで行ってしまっている。
膨れ上がった想像を思考が処理しきれていない。
私は溜息を吐いて、考えることを止めた。
今日はもう終わりにしよう。
どうせあの女の子だって大したことでは悩んでいないさ。
世の中に想像通りの事実なんて中々ないものだ。
ビールを手に取り、私は部屋へのドアノブに手をかけた。
想像通りではありませんようになんて、神頼みは柄でもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7020a/

群集ペパーミント

2010年10月11日04時25分発行